



Title	編輯を終へて
Author(s)	山本, 檣信
Citation	懷徳. 1930, 8, p. 89-90
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88823
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

編輯を終へて

山本 檜 信

生を初め會員十七名京阪電車天満橋停留所に集合、宇治川ラインを周遊す、初夏の山水を心ゆくばかり觀賞し、黄檗にて普茶料理を味ひ午後八時解散した
八月七日 財津吉田兩先生及幹事五名集合、會誌刊行に就て協議、

八月十三日 本堂理事長小倉先生、住友總理事の重職に就かせらる、先生の高潔温厚なる人格が、大阪財界の向上發展に資するところ甚大なるべきを思ひ、謹みて慶賀の意を表し奉る、

八月二十六日 午後六時三十分より百花村にて東京へ轉居せらるゝ會員三輪中將の送別會を催す、出席者十七名、財津先生の送別の辭、三輪中將の謝辭あり、また會員今川せい君傳道の目的を以て渡支さるゝと聞き招待せしところ出席さるゝ、よつて山本幹事たちて今川君を激勵するの辭を述べ、今川君の答辭あり、今西君の講釋一席、吉田先生の惜別の詩朗吟三輪中將の臺灣視察旅行の詩の披露などありて興趣盡きず、別席にて會談尙數刻、九時三十分閉會する

三日見ぬ間の櫻花、いつしか若葉青葉の夏を迎へ、また變じて紅の錦を織る、世相變轉の急激なる、またこれに過ぎたるありて、進化に遅れざらんと人は馬車馬のやうにかけまはり、いつしか人間本來の面目さへ忘果てゝ、機械のために貨幣のために奴隸となり了るのとき、忙中閑をつくり、聖經賢傳を繙きて、修身治國平天下の深奥の道を尋ね日常平素體驗するところを省察して、向上の一路を辿るの友集ひて、ここに一百名、温厚篤學なる會長財津先生の徳望を慕ひ、諸先生の懇切なる指導を受けて、身心の鍛練に怠るのひまなきぞめでたき、まづ本會の自讃はこれ位にて遠慮仕る。

由來本會には名物男が多いといふ噂を聞いてゐる、藤塚、酒井の兩君の如き、その一人かも知れぬ、勤務の餘暇灼熱の酷暑ものかは、材料を蒐集する、

印刷屋と談判する、校正をやる、大車輪である、そうしてめくら蛇におちずの譬で遮二無二御寄稿をお願いにまゐるにもかかはらず、快く御援助下さることをいつも有難く感泣してゐる、不行届失禮の段は幾重にもお詫び申上る、お蔭でいつも諸先生の名論卓説の載つてゐることはいさゝか本誌の自慢とするところで會員諸君の論説と共に熟讀玩味をお願ひ致すわけである、今後會員諸者の努力によつて層一層向上發展自慢の鼻の彌々益々高くなることを祈つてやまぬ。